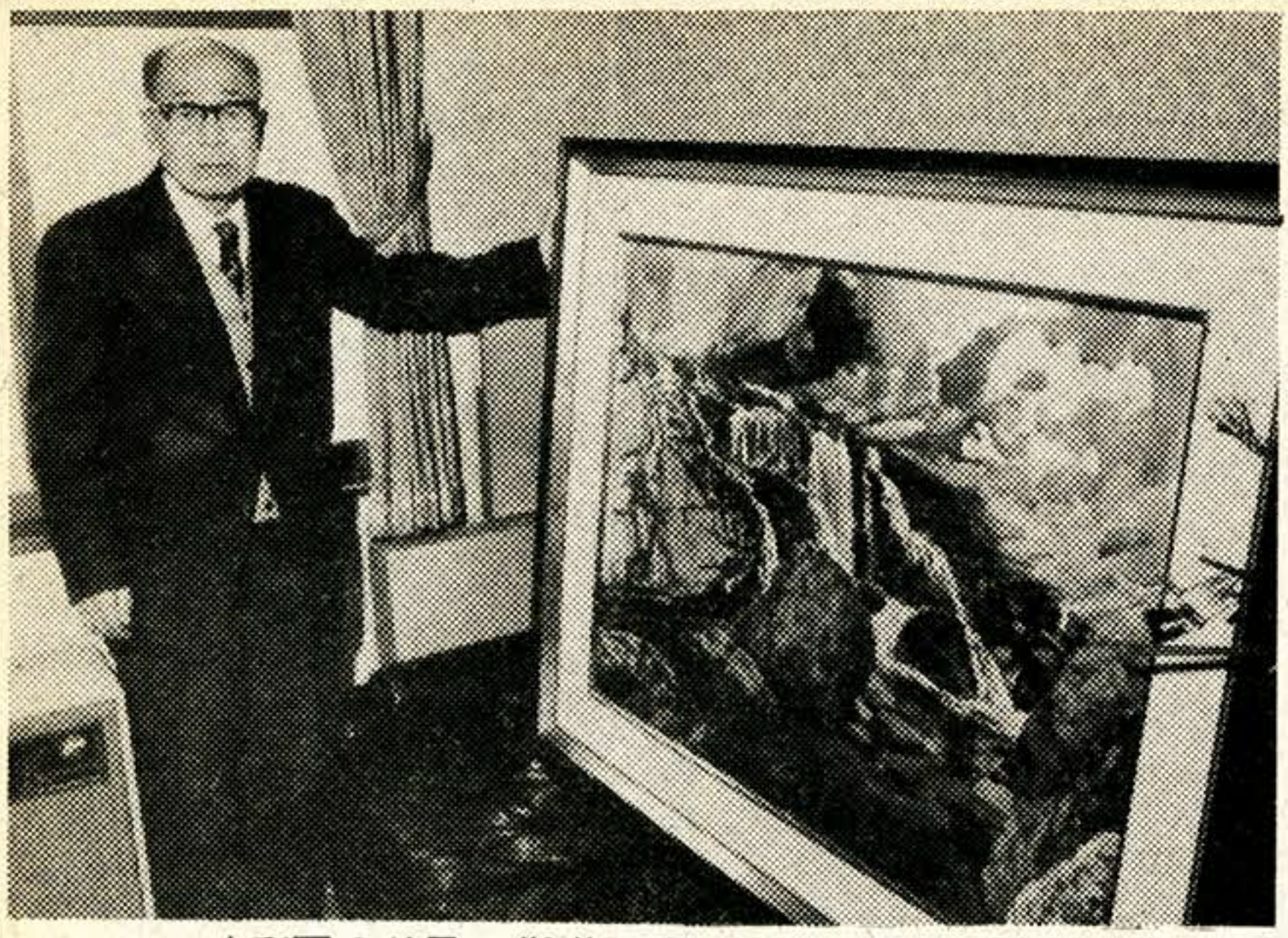
釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔

○下○



水彩画の普及、指導に力を注いだ佐竹さん

油絵にない柔らかさが魅力

佐竹さんが、郷里・山形県から釧路に転住したのは四十三年のことだ。長男の泰さん（耳鼻咽喉科医）が釧路で開業していたから、それまでもひんぱんに釧路を訪れていた。しかし、いよいよ釧路に居を定めることになって、佐竹さんは心に期するところがあった。釧路で水彩画を盛んにしようーと。

「私の一生を通じて、釧路で「してくれました」と今、山形県米沢市で釧路時代を思い出す。

釧路に来てすぐに、日本水彩画会釧路支部を結成し、支部長となる。さらに「ひまわり会」や「はしどい会」といった。絵筆を走らせながら、残雪のころの風景が好きで、東北海道の各地をくまなく歩いた。

制作は〝現場主義〟である。

「表現の自由という点からいえば油絵はまさっているが、水彩には、油絵にはない柔らかさがあります。その魅力が私の気持ちにあっているんですね」

普及、指導に力注ぐ

14年間、釧路支部も結成

佐竹　泰次郎さん

特別賞〈水彩〉

くつかの幼稚園の母親教室で水彩画の指導にあたった。日本水彩画会釧路支部の当初会員は約二十人だったが、佐竹さん（故人）をはじめとして、仲間の方々も一生懸命、協力さんを中心とする普及、指導の十四年間は、最も精力を注ぎ込んだ時期でした。片腕となっていただいた高島繁次さ

雪の中に何時間も立ちつくすことも珍しくない。対象に向かった時のその気はくが、作品の一点一点ににじみ出ている。

明治三十一年、山形県東根市に生まれた。山形県師範学校に進み、ここで水彩画を始める。大正十年卒業。同十四年に樺太に移り、大泊小学校を経て、豊原第一小学校で長く教鞭をとる。終戦で引き揚げ、米沢東高校から米沢市立女子短大（のち県立）でそれぞれ美術を教え、昭和三十六年に退職した。米沢市にあっても、日本水彩画会米沢支部を創設するなど、美術振興に情熱を燃やした。釧路に来るとき、米沢市から感謝状を贈られている。

再び米沢市に戻り絵筆

五十六年から再び米沢の人となった。東京での個展、画集発行などいくつかの計画があったが、病いを得て断念しなければならなかった。

「健康こそが本当の幸せと思っています。でも、命の続く限り、絵は描き続けます」ー知床五湖や利尻富士など、北海道の風景は思い出深い。

日本水彩画会員、文部大臣賞受賞、示現会員受賞、ル・サロン会友、個展十四回、外遊三回、画集二冊。山形県米沢市松ケ岬三の二の四。八十五歳。